

畜産部門における生産共同化について（2）〔講演〕

愛媛大学助教授 若林秀泰

（3）担当主任の若返り

最近いろいろな経営や技術の体験発表会などに出て見ますと気が付くことは、そういうところで優秀な成績を収められる方々の年齢が、大体20代あるいはせいぜい30代の若い世代であるということです。これは生長材農業の1つの特徴だと思のです。

私はこういうことに興味を持って調べてみました。果樹とか畜産をやっている地域と、水田地帯と山村と、この3つを例にとりまして、それぞれの村で中心になって活動している農家、あるいは部落での中心的な実行組合の組合長とか、農協の理事さんとか、部落の指導者層というものの年齢が、農業地域によって違うかどうかということをお愛媛県で調べてみたわけですね。その結果によりますと、果樹とか畜産と取り組んでいる地域は大体において、水田地帯あるいは山村に比べまして、10才～20才世代が若返っているということをお発見したわけでありませう。

このことは、言葉を変えますと、果樹とか畜産、特に戦後伸びてきましたこういった部門には非常に新しい技術が要る。そこでいわば、経験年数がものをいうといった、経験ではこういう農業に取り組めない、これに対しまして、水田地帯とか山村地帯のように、昔から旧態依然たる農業をやっている場合には、何と申しても年齢の蓄積による経験がものをいう。この違いが現われているんじゃないかと思おうわけでありませう。

そこで（こういうことから）果樹とか畜産という新しい成長材部門に取り組んでいる地域では、比較的若い世代がものを言うチャンスが強くなって来る。ここからは私の共同化の動きがでてくると思おうです。と申しますのは、従来農村で、生産の共同化というものは古い形でいろいろございませう。例えば、戦争中にいわゆる上から命令されました強制的な共同作業がありませうし、あるいは共同炊事もありませう。また古くからの習慣で水利を共同化するなどの、そういう古い習慣的な共同化というものがあつたわけですね。しかしながらこういうふうな共同化と

いうものは、多くの場合、例えば戦争が終わると、あるいは習慣がだんだん古くなってきますと失敗をして跡形もなくなってしまうものが多かったわけでもありますが、ここ数年来急速に伸びてきました共同化というものは、そのような上から強制されてやる共同化、あるいは昔から習慣だからやる共同化と違って、自分達がお共同化をやることによってもうけようという、もうけるための新しい意味の共同化がでてきたと思おうです。こういうふうな新しい共同化というものは、矢張り若い世代の方が取組み易いし、採り入れやすい。こういうところから共同化の動きがでてくるのが当然じゃないかと思おうわけですね。

（5）技術革新（機械化と分業化）

とくに果樹や畜産の面におきましては、技術が非常に進歩しているとよく云われますが、その技術革新は経済理論的に考えてみますと一体どういう形ででてくるかと申しますと、私は機械化と分業化ということじゃないかと思おいます。即ち新しい技術がでてきたというのは、例えば養鶏を例にとりませうと、従来の平飼いからバタリーやケージがでてくる。あるいは豚でありませうと、従来の極めて原始的な飼い方からデンマーク式豚舎だとかあるいはケージ養豚といったものが生まれてくる。あるいは酪農の場合にいたしましても、古い畜舎で和牛の飼育とあまり変わらない飼い方をしていたのが、改良畜舎をつくり、そこでミルクカーなどを使い、資本装備といませうか、いろいろな機械を採入れた経営に変わってくる。これが畜産の技術進歩だと思おうです。と同時に、個々の技術というものが非常に高度化してまいりまして、なかなか畜産や果樹の技術というものを習得することも困難になってくると思おいます。

機械化には一定の規模が必要

その場合、まず機械化の問題を考えてみますと、こういうふうな畜産や果樹にどんどん機械が採入れられて行く、そこで問題になりますのが従来の経営

岡山畜産便り 1961.08

規模との関係です。機械というものはある程度以上の大きさの規模がないと充分使いこなせない。こういう厄介な問題を持っています。この点については、戦後農村で農産物加工の農村工業が盛んに行われた時期があります。例えば澱粉の加工であるとか、あるいはいろんな農産加工を農協が随分とりあげました。多くの場合それがほとんど失敗してしまいました。農産加工に手を出して農協が赤字を出して倒れた。こういう農協が随分ございます。この理由をいろいろしらべてみますと、1つには次のようなことが言えると思います。農村工業、農産加工をやろうと思うとかなりの機械設備を導入してやる。ところが、そういう機械設備を遊ばさないでフルに運転するには充分な原料がなくてはできない。ところが農協というせまい地域で、組合員から原料を集めるというだけでは、機械をフルに運転するだけの原料が集まってこない。そこで機械が無駄に遊ぶために赤字が生じ経営が混乱する、こういう経過をたどった場合が多いと思うんです。これなども1つの規模と機械化との矛盾ということだと思いますが、とくに個別経営の場合におきまして、経営の規模というのが限られているところへどんどん機械化をしていきますと、必らず機械に伴って余分の費用が生じて、その生産費がだんだんに上がって行って、結局機械化貧乏ということになる。こういうことがよくいわれます。

機械化は技術進歩の方向としてしなければならない。しかし個別経営という規模の小さいところへ機械を無理にすすめられない。こういう矛盾の解決策として機械の共同利用という方向から共同化の動きがでてくると考えられるわけであります。立間の法人の場合も、そこで非常に膨大な機械化をすすめた結果、機械化によってかえって赤字を生ずるということに気が付いて、いろいろな大農機具設備を共同利用するための法人を作ろうという動きがでてきたわけであります。

技術の進歩は分業の方向へ

また一方において分業化ということがありますが、さきほど申し上げましたように、高いレベルの技術がどんどん伸びてまいりますと、1人の人がいろいろ

ろな技術をなんでもかんでもやる。例えば、酪農について申しますと、牛の飼い方、管理の技術、飼料栽培の技術、その他の関連する技術の専門家に1人でなるということはむづかしい。そこでいわば牛の飼い方については、ある人が専門的にやる。飼料作については別の人が専門的にやるといふような分業をやって行くという方向が技術進歩をうまく採入れる1つの方法じゃないかといわれております。

そこでいろいろな分業をやって行こうと思えば、1つの家族経営という形の中にとらわれている限りではそういう分業ができない。個々の家という枠をはずして各人がそれぞれ分業をやって行くという形が共同化のめばえに結び付くんじじゃないかと考えるわけであります。

(6) 経営規模拡大の制約

以上いろいろ述べてまいりました問題を考えてみますと、共同化の方向、あるいは專業化の方向が当然でてくるわけでありますが、わが国の農業経営の場合の経営規模というものの拡大には、現在農地法の関係あるいはその他いろいろの関係で規模拡大の制約があります。その制約を破る方法としまして、個別経営の共同化によって、專業化の方向を打出していこうという動きが、商業的農業の場合に生まれってくるのは、私はむしろ当然の方向じゃないかと考えるわけでございます。

3、共同化のねらい

共同化ということはよく言われますが、共同化のねらいについては案外ルーズに考えられている場合が多いと思うんです。そこでこの点を少し整理してみますと、私は消極的なねらいと、積極的なねらいと2つのねらいがあるように思います。

(1) 共販態勢の強化(品質の約一化)

第一は、消極的なねらいであります。

共同化といいますのはいわば生産の問題であります。生産の共同化からいたしますと、消極的ないしは間接的なねらいになるのが共販態勢の強化ということであります。

御承知のとおり、生産の共同化をやることによって経営がよくなった。しかしながらこういう商業的農業の場合でありますと、折角安いコストと高い技

岡山畜産便り 1961.08

術で作り上げた生産産物を有利に販売しなければ、その生産の共同化の仕上げができないわけでありませう。生産の面だけの問題を考えて販売の問題をぬきにするということは極めて誤った考え方でありませう。そういう意味におきまして、共販態勢を強化する、いいかえますと、流通ないしは販売の共同化をやりながら生産の共同化に取り組むという、この点は私が大事だと思うんです。つまり、共同化ということは、生産の面のみならず、販売とかあるいはもっと広いといいますと、流通の共同化と結び付いて初じめて本来の効果を発揮するものだとは私は考えております。そういう意味におきまして、共販態勢を強化するためには何が大事かといいますと、さきほどちょっと触れましたように、品質を揃えるということが共販態勢を強化するための第一の条件であります。そういう共販態勢を強めるために品質を統一することが、共同化の第一のねらいじゃないかと考えております。

具体的に申しますと、養鶏の場合で例にとりますと、卵の品質を揃えるためには、まず鶏自身を揃えなければならない。そういう意味で育雛を共同でやる。給餌方法を統一する。あるいは管理技術を統一する。こういうことがいわば品質を揃えるための重要なねらいであります。豚の場合、酪農の場合もこれに準じてお考え願いたいと思います。

(2) 利潤の追求(粗収入の増加・経営費節約)

第二番目に積極的なねらいであります。これは生産の共同化自体によって、何を一体ねらっていくかということではありますが、これは必ずばり申し上げまして利潤追求ということに尽きるかと思っております。

このことは、共同化によってもうけていくということではありますが、具体的に申しますと、大規模経済の有利性ということでもあります。経営規模をだんだん拡げていくに従いまして、いろいろな経済的な有利性がでてくるということが、従来経済学でいわれております。この点はむしろ農業よりは工業の方で従来このようなことがいわれてきたわけでございまして、小規模な工場に比べて大規模な工場のほうがいろいろな有利性がある、こういうことがいわれてまいりました。

農業の場合には、いろいろな自然的な条件とか、ある

いは土地とか、いろいろな条件が働かしまして、大規模経済の有利性が働かにくいというふうに云われておたわけであります。ところが、それがいわゆる従来のような米麦作とちがいで、とくに畜産のように、土地というものにあまり結び付かないでやれる部門が発展してまいりますと、大規模経済の有利性がだんだん強く働いてくるようになったと思うんです。その証拠に、最初にちょっと申し上げましたように、大資本が畜産に手を出したということ自体が、大規模経済の有利性が畜産の場合に強くあらわれてきた。その可能性が出てきたということから大資本が畜産に手を出してきたものと私は理解しております。

そこで大規模経済の有利性がどういう点に畜産にあらわれるかといいますと、それは2つに分かれると思います。

$$\text{粗収入} - \text{費用} = \text{利潤}$$

(拡大) (節約)

つまり利潤をふやしていくことは、「粗収入を増大する」ということと、「費用を節約する」という、この両者によって可能なはずであります。

それでは一体共同化によって粗収入の拡大、費用の節約ということが、どのようなことを通じて可能かということを考えてみますと、畜産に限って申しますと、まず粗収入拡大ということは、共同化の場合次の4点を通じて実現されると考えております。

① 畜舎の改善

(共同化によって畜舎が飛躍的に改善される)

② 管理技術の向上

(管理技術が標準化してくる。個々の農家がばらばらに畜産をやるのと違い多頭飼育を行って専門の管理人とか、最も管理技術の高い人が一括して飼養管理にあたる)

③ 給餌方法の合理化

④ 機械化の伸展

(個別経営においては機械化を行うことによって粗収入は増加するが、同時に費用が非常にかさむ。共同化の場合にはその心配があまりない)

それから費用の節約の面ではありますが、これは一言で申しますと、固定費用の節約ということだと思っております。経営の費用としては

岡山畜産便り 1961.08

固定費用
変動費用

に分けられますが、「固定費用」というのは、経営規模が大きくなっていてもその割合には費用が増えないもの。「変動費用」というのは経営規模が2倍になった場合、例えば500羽飼っていた養鶏農家が1,000羽になった場合に費用も2倍になる。1,500羽に規模を拡大すると費用も3倍になる。というふうに費用がある程度比例的に変わっていくのが変動費用であります。これは畜産の場合ですと、たとえば飼料費は典型的な変動費用でありますし、ひな代なども変動費用であります。

これに対しまして、建物費であるとか、大農具費とか、また重要なものとして減価償却費などは、規模が2倍になっても費用は倍にならないでそれ以内にとどまる、というような固定的な性質をもっております。

そこで共同化によって経営規模を拡大した場合に、変動費用は規模を倍にした場合比例してふえていきますが、固定費用はそれ程ふえない。ここに費用が節約される可能性がでてくると考えられるわけであります。

少し事例を申し上げてみたいと思います。これは京大の農家簿記研究所で、畜産の教室や京都府あるいは試験場の数字を使いまして、いろいろな多頭飼育の場合の収益計算をやってみた1つの事例であります。—（多頭飼育の場合の収益性についての調査例を随分調べてみたのですが、これがあまりなく、農林省が2～3年前に乳牛の場合の1、2、3、4頭、5頭以上という収益計算の調査例がわずかにありますが、もっと大きな多頭飼育の場合の収益がどうなるかという調査事例が殆んどないわけです。肝心なものがないところで共同化を進めて行くというのは非常に危険であります、そういう意味で共同化をやって行く場合には、その収益計算がどうなるかという記録を充分に残しておいていただきたいと思ひます。）—

〔養 鶏〕

多数羽飼育による収益性の増加というものは、それほど顕著じゃないという結果が出ております。

というふうに大体、規模に並行してごく僅かに収

益が上がり気味であるといえるわけです。これを1,000羽、2,000羽、10,000羽と規模を上げていかなないと、養鶏の場合の大羽数飼育の有利性が出てきにくいのではないかと考えられます。

〔肥 育〕

若令肥育の場合の1頭飼育と2頭飼育の比較、壮令肥育の場合の1頭飼育と2頭飼育の場合の比較計算例によりますと、この結果が出た根拠を調べてみますと、建物費、農機具費、および減価償却費というものが、2頭飼育になっても必ずしも2倍にならないで、1.2から1.5倍程度にとどまっております、こういう点から収益が倍以上になっているようであります。

壮令肥育の場合は次のようになっています。

〔乳 牛〕

乳牛の場合、これは京大の畜産の教室の数字を使って計算したもので、12頭飼育と24頭飼育と30頭飼育とについてであります、これはいずれも3戸の共同の事例

飼育規模による養鶏純収益比較 若令肥育純収益比較

飼養規模	純 収 益
一〇〇羽	四一、〇〇〇円
二〇〇羽	八二、〇〇〇円
三〇〇羽	一二三、〇〇〇円
五〇〇羽	二〇五、〇〇〇円

飼育規模	純 収 益
一頭飼育	一七、〇〇〇円
二頭飼育	三三、七〇〇円

飼育規模	純 収 益
一頭飼育	一六、〇〇〇円
二頭飼育	三二、〇〇〇円

壮令肥育純収益比較

酪農の規模別収益比較

経営規模	純 収 益	酪農生産費	企業利潤
一二頭飼育	四三、〇〇〇円	三〇、〇〇〇円	一三、〇〇〇円
二四 "	八六、〇〇〇円	六〇、〇〇〇円	二六、〇〇〇円
三〇 "	一〇九、〇〇〇円	七〇、〇〇〇円	三九、〇〇〇円

岡山畜産便り 1961.08

からとっているようであります。これで見ますと、酪農の場合は非常にはっきりした規模別の有利性が出ております。

こういうふうには、酪農の場合の共同化による多頭飼育が頭数のふえるに従い、生産費が下がり、純収益が急速に上がっていくという結果がはっきり出ております

これは非常に数少ないじれいから調べました、粗収入を高め、費用を節約して収益を上げる可能性が十分に存在し得るといふ一例に過ぎませんが、これが共同化の第二のねらい、すなわち利潤追求の具体的なケースであります。

以上のように、共同化のねらいというのは、消極的には、共販態勢の強化であり、積極的には利潤追求である。ここに畜産における共同化の具体的なねらいを定めるべきじゃないかと考えるわけです。

(続)